

胆管癌の一切除例

浜松医科大学 医学部 第 2 外科

坂口 孝宣, 鈴木 昌八, 大石 康介, 鈴木 淳司,

福本 和彦, 太田 茂安, 稲葉 圭介, 中村 達,

今野 弘之

【背景】近年, 体底部限局 pT2 胆嚢癌に対する胆管温存術式が一般化してきた。しかし, 術後の異時性胆管癌の報告が散見される。今回我々は, ss 胆嚢癌術後 90 月に発見された胆管癌を切除した。文献的考察を加えて報告する。【症例】58 歳, 男性, 1997 年 7 月に胆嚢ポリープの診断の下, 開腹胆嚢摘出術を施行。病理検査にて体底部に限局した ss 胆嚢癌であったため, 1 月後に肝 S4a+S5 切除, リンパ節郭清を行った。追加切除した胆嚢管断端は癌陰性であり, 胆管を温存した。再切除組織に癌遺残は認めなかった。2006 年血清 ALP の上昇を認め, MRCP 上部胆管狭窄を認めたため, ERCP ブラシ細胞診や ENBD 留置による数回の胆汁細胞診を施行したが, 全て癌陰性であった。癌の可能性を否定できず, 2006 年 3 月手術を施行した。臍上縁で切断した胆管粘膜に迅速病理で高分化腺癌を認めたため, 予定した拡大肝右葉切除術に加え, 臍頭部十二指腸切除を追加施行した。迅速病理で癌陰性を確認した左肝管で胆道再建を行なった。病理上, 主病巣は総肝管原発の最大径 5mm, 進達度 ss の高分化腺癌であった。異型を有する非癌胆管粘膜を介在して右肝内胆管, 右肝管, 左肝管の ca in situ (CIS), 下部胆管の CIS が存在し, skip lesion と考えられた。臍頭後部リンパ節転移, 臍頭部神経浸潤を認めたが, 14 月後の現在, 再発をみとめず, 外来通院中である。【結論】胆嚢癌に対する胆管温存手術の一般化に伴い, 胆嚢癌術後残存胆管の異時性癌症例が散見されるようになった。本症例の癌が飛び病巣を含めて広範囲に進展していることより, 異時性胆嚢・胆管癌の発生機序として Field carcinogenesis を考慮する必要がある。よって, 胆道癌術後異時性胆道癌症例は広範囲進展を考慮にいたれた術前検査, 手術計画が重要である。